

## 日16-125 (ショートコメント)

### 「何者」 ★★★

2016 (平成28) 年9月1日鑑賞<東宝試写室>

監督・脚本：三浦大輔

原作：朝井リョウ『何者』（新潮文庫刊）

二宮拓人（冷静分析系男子）／佐藤健

田名部瑞月（地道素直系女子）／有村架純

小早川理香（意識高い系女子）／二階堂ふみ

神谷光太郎（天真爛漫系男子）／菅田将暉

宮本隆良（空想クリエイター系男子）／岡田将生

サワ先輩（達観先輩系男子）／山田孝之

2016年・日本映画・98分

配給／東宝

◆私は日本は世界一平和で安全な国、そして衣食住も足りているリッチな国であると思っているが、そんな今の時代の日本を生きる20代の若者は大変らしい。とりわけ、就活に精を出さなければならない大学生たちは？

直木賞や芥川賞は毎年話題になるため、2015年の芥川賞を受賞した又吉直樹のようなよほどの「変わり種」でないと注目されないから、平成生まれの朝井リョウが「何者」で2012年の直木賞を受賞したことを私が知らなかったとしても仕方がない。彼のデビュー作で映画化された『桐島、部活やめるってよ』（10年）は結構面白かったそうだがさて本作は？

そう思ってチラシを見ると、本作は「就活」をテーマとした5人の大学生たちの青春群像劇らしいから、それだけで私はノーサンキュー。そう思ったが、二階堂ふみが出演していることと、名前はよく聞くもののまだ1度もじっくりみたことのない有村架純が出演しているため、鑑賞することに。

◆演劇ユニット「ポツドール」を中心に活動している三浦大輔監督の『愛の渦』（14年）はそれなりにショックだったし、何よりも激しい喘ぎ声でインパクトを与え続けた新進女優、門脇麦に巡り合えたことが収穫だった（『シネマルーム32』未掲載）。同作は今ドキの大学生の裏側の青春群像劇だったのに対し、本作は今ドキの大学生にとって学生生活最大のイベントになっている「就活」にみる表側の青春群像劇だ。就活は当然表の舞台であるにもかかわらず、なぜ本作のタイトルは「何者」とされているの？そこらあたりが本作のポイントだが・・・。

◆本作に登場する5人の主人公は、①なぜか男同士でルームシェアしている、冷静分析系男子・二宮拓人（佐藤健）と天真爛漫系男子・神谷光太郎（菅田将暉）②その2人の親友でちゃっかり神谷を恋人にしてしまった、地道素直系女子・田名部瑞月（有村架純）③二宮、神谷の上階に住む意識高い系女子・小早川理香（二階堂ふみ）と、その理香の部屋で3週間前から同棲している空想クリエイター系男子・宮本隆良（岡田将生）。そしてこの5人をつなぐ役割をしているのが、達観先輩系男子・サワ先輩（山田孝之）だ。

演劇界の鬼才、三浦大輔監督が脚本も手掛けた本作は5人の主人公が個々に交わす多くの会話のほか、「就活対策本部」とされた理香の部屋に集合した5人が交わす会話がストーリーのメインとなる。しかし、クライマックスからラストにかけて登場するSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の爆発（暴発？）までは、何かと言い争いを避け、本音を語ろうとしない今ドキの若者たちの会話の連続だから、団塊世代の私には全然面白くないのは当然。なぜ、貴重な大学時代を時間の浪費ばかりしているの？そんなイライラの連続だったが・・・。

2016 (平成28) 年9月2日記